近代造船の先駆者・渡辺蒿蔵（上）

―幕末長州藩における海事志向の影響を踏まえて―

牛見　真博*

Short biography of Kozo WATANABE, a pioneer of the modern shipbuilding industry;the first half : Based on the influence of the maritime intention in the Choshu Domain at the end of Edo period

Masahiro USHIMI

Abstract

Kozo WATANABE was born in Hagi, Choshu Domain (present day, Hagi City, Yamaguchi Prefecture). He attended *Shoka Sonjuku* (a private school run by Shoin YOSHIDA) in 1856 to study under the principal's supervision at the age of 15 years old. He studied naval architecture in the United States and the United Kingdom inspired by the principal (Shoin YOSHIDA) at the end of the Edo period. After returning to Japan, he entered the Ministry of Engineering of the Meiji government and acted as the second dock-master of the Nagasaki shipyard. Furthermore, he made an effort for the construction of Tategami dock which was admired as the most advanced dock in Asia. These great achievements led him to be called the pioneer of the modern shipbuilding industry. However, preceding studies have given us only snippets of information about him, and neither a detailed causal relationship nor events associated with him have been described. Thus, his biography is reorganized based on the influence of the maritime intention in the Choshu Domain.

Keywords: *Kozo WATANABE（Seizaburo AMANO）, Shoin YOSHIDA, Maritime intention*
キーワード：渡辺蒿蔵（天野清三郎）, 吉田松陰, 海事志向

１　はじめに

長州萩に生まれた渡辺蒿蔵（天野清三郎、1843−1939）は、15 歳で吉田松陰が主宰する松下村塾に入門し、感化を受けた。志士として活動した後、幕末期に藩の海外留学生としてアメリカ、イギリスに渡り、造船を学んだ。帰国後は工部省に入り、官営長崎造船所第二代所長（後に長崎造船局となり初代局長）となり、東洋一と称された立神ドックの建設に尽力する等、我が国における近代造船業の端緒を拓いた人物である（図１）。

彼が志士として国事の奔走から造船分野へと身を転じた理由については、後に次のように述べている。

> 私は高杉、久坂其他の人の様な働きは出来ぬ、愚痴であつた。併し松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた故、船大工なら私にも出来ようと思つて、慶応三年ロンドンに渡つた。これが船に関することに身を致すに至つた所以である [1]。

この回想からは、当時の藩政との関わりは見えてこない。しかし、後述するように幕末期に長州藩から海

＊一般科目　2018 年 9 月 28 日

外に渡った人々は限られており、渡辺がそれに選ばれたのも藩政との関わりから海外派遣の意義を認められたからに相違ない。

渡辺蒿蔵に関する先行研究もまた、彼のある程度の概略は伝えてくれるものの内容が断片的であったり、前後関係や因果関係が省略されていたりして、とりわけ渡辺の藩内での立ち位置は掴みにくく、隔靴掻痒の感があることは否めない[注1)]。これは渡辺の人物研究上の史料が限られていることにも起因している。

そこで渡辺蒿蔵（天野清三郎）の基礎的研究として、松陰門下において志士から造船分野に進んだ経緯について焦点を当てつつ、師である吉田松陰をはじめとする幕末長州藩に色濃く存した海事志向に着目し、先行研究の空白部分を周辺事情によって埋めながら改めてその人生を追うことを意図するものであり、本稿はその前半部にあたる。

なお、本稿で用いる「海事志向」とは、航海や操船技術をはじめ、幕末に盛んになった日本を防禦するための方策としての造船、艦砲を含む海軍知識・技術の習得を目指すものとする。

図１　欧米留学中の渡辺蒿蔵（萩市立萩博物館蔵）

２　松下村塾時代

天野清三郎（後の渡辺蒿蔵）は、天保 14 年（1843）4 月 3 日、萩の川島の大組士渡辺茂助の三男として生まれた。幼くして天野駒太郎の養子となるが、安政 2 年（1855）、13 歳の時、養父の死に伴って天野家の家督を継いだ。復姓して渡辺蒿蔵を名乗るのは、明治 7 年（1874）のことになる。幼少時代は吉松塾に出入りしており、久坂玄瑞とはこの時分から親交が深かった [2)]。後の人生を方向づけた松下村塾への入門は、安政 4 年暮の 15 歳の時で有吉熊次郎に誘われている [3)]。また昭和 8 年の取材の際、自ら次のように述べている。

> 当時は松陰先生の評判がよく、誰も彼も松下に行つて居るといふやうで、云はば流行であつた、又松下村塾へ行けば、何か仕事にありつけると思つて居つたものだ [4)]。

塾では、有吉熊次郎や品川弥二郎、作間忠三郎（後の寺島忠三郎）らと仲が良かったようである [5)]。松陰が最初に天野について記しているのは、安政 5 年 6 月 19 日の江戸の久坂玄瑞宛書簡においてである。

> 近来の勉強家は岡部の外有吉熊次郎・木梨平之允等なり。中井の姪の由天野清三郎中々奇物、他人未だ深くは取らず、僕独り之れを愛す [6)]。

「奇物」という表現の真意は推測するしかないが、「他人未だ深くは取らず」からは、必ずしも誰かの目に留まる以前から、松陰は天野を見所ありと感じていたことが窺える。安政 5 年 12 月、野山獄で幽囚中の松陰は天野に次の詩を贈っている [7)]。

> 凛冽梅花埋雪中　凛冽たる梅花雪中に埋るも
> 暗香馥郁遠相通　暗香馥郁として遠く相通ず
> 他時果有探尋客　他時果して探尋の客あらば
> 知是将来後起雄　知る是れ将来後起の雄

天野を「雪中」に埋もれる「梅花」になぞらえ、まだその能力は人の知るまでには至っていないが、よき指導者が現れれば、将来必ずや有望な人物になるであろう、と詠んでいる。天野の人生は、まさにこの松陰の漢詩の通りとなる点で示唆的な人物評である。ちなみに、天野が「後起雄」と呼ばれることがあるのは、この詩の結句の三文字に由来している。

松陰の期待に応えようとする天野の様子も窺え、「東坡策」を読了したことを松陰に報告している。それについて、安政 6 年正月 19 日、野山獄からの岡部富太郎宛書簡では、松陰もまた天野が「東坡策」を読破した様子を喜んでいる。

天野後起雄が東坡策読了し候所、同囚安富生是非写し取るとて汗水に成つて居る故、数日延引なり、全く忘却せず[8]。

この時期、松陰は野山獄で老中間部詮勝の暗殺を計画するも、江戸にいる久坂や高杉らから時機尚早との諫言があり、他の門下生たちも賛同には至らず、憤懣やるかたなく胸中穏やかではなかった。そうした中で、年少の天野が「東坡策」を読了したという報告は、松陰にとって一服の清涼となったのであろう。しかし、次第に門下生たちが敬遠していくのを察した松陰は、遂には絶食という行動に出る。その翌日（同月 27 日）に入江杉蔵宛書簡に天野の評価が見える。

天野は奇識あり、人を視ること蟲の如く、其の言語往々吾れをして驚服せしむ。誠に李卓吾の如きを得て之れを師とせしめば、一世の高人物たらんも、恐らくは遂に自ら是とし、其の非を知らずして死せん[9]。

先にも松陰による天野の人物評として「奇物」語を見たが、ここでも「奇識」という語で評価されている。人とは違う視点からの優れた識見といった意味であろうか。人に対する観察眼に長け、その言葉によく驚かされることがあるとしており、優れた人物が師となればひとかどの人物になるはずだが、そうでなければ自分が正しいと思い込み、自らの非に気づかず無為のうちに一生を終えてしまうだろうという。このうち、「其の言語往々吾れをして驚服せしむ」とは、天野の次のような面を念頭に置いていたものと思われる。同年 2 月の松陰による高杉晋作宛書簡の一節に、次のように見える。

天野清三郎、此の生昨年已来一事も吾が説に同意せず。奇見異識他日必ず異人たらん。此の人深く老兄（高杉）に服す、其の他一人も服する人なし。僕遂に其の才を竭す能はず。足下幸に之れを心に記せよ[10]。

この文面から、天野は必ずしも松陰の諸説に同意することなく、場合によっては自らの見解を率直に師にぶつけていたことが窺える。また、天野が唯一、晋作に対しては一目置いていることを伝え、その育成を託してもいる。

同じ時期、入江杉蔵との比較でも天野が登場している。間部要撃策の実行を期待していた入江も結局動かないことに対して、松陰は小田村に宛てて次のように綴っている。

僕子遠（入江杉蔵）を信ずること甚しきに過ぐ。……子遠も亦奴才、決して能く人を奴とする者に非ず。僕子遠を無逸（吉田栄太郎）の上に措く、惑へるを知り、悔ゆるを知るなり。天野生と無逸とは、識見遂に及ぶべからざるなり[11]。

奴才とは、鈍才の意。つまり、入江に期待をかけたのは買いかぶりに過ぎず、天野清三郎や吉田栄太郎の識見には及ばないことが分かったという皮肉であるが、天野が引き合いに出され高く評価されている。同年 5 月 19 日、天野は松陰から厳子陵の詩を送られており、その跋には次のようにある。

右、厳子陵の詩、録して天野清三郎に示す。余嘗て子陵の志は天下第一流に在りしことを論ず。但だ鄧・桓諸人の為めに先鞭を著けられ、身其の下に立つを欲せず、枉げて加脚の一著を為せるのみ。清三は奇識あり、余因つて此れを示し、且つ曰く、子、宜しく子陵以上の人となるべしと。嗚呼、吾れ此れより去る、清三の後来果して何如を見ること能はざるなり[12]。

後漢時代の厳子陵は、幼少から後の光武帝と共に学んだが、その即位後も帝との論議の後、足を帝の腹の上に置くなど友として対し、臣として仕えることをしなかった。また、先に功名を立てた他の臣の下につくことも嫌がり結局隠棲した。つまり、松陰はかつて厳子陵について、清節の士としての志は一流と論じたが、どこまでも人の下につくことを嫌がった彼のようになっては結局能力を発揮できずに終わってしまうとして、ここでは諷刺の意をもって戒めている。

天野には、自己を是とする傾向があったことをすでに松陰の指摘で見てきたが、彼が狭隘な見識や頑なな態度に凝り固まり、成長の芽を自身の手で摘み取ってしまうことを憂慮し、今後の人生に必要な姿勢を教示しているのである。これから死にゆく我が身は天野の将来を見届けることはできないためという吐露に師情が溢れている。従来書の中には、天野

は勉強が非常に苦手で出来が悪かったという類のエピソードが見受けられるものもあるが[注2)]、松陰直接の天野評からすれば、これらは後人による付会に過ぎないであろう。松陰による天野の人物評は、潜在的な能力は高いながらも、時に自己の才を過信し過ぎるところもある、といったところであろうか。

同年5月には江戸送りを控えた獄中の松陰を、同門の久保清太郎と見舞っていることが、入江杉蔵宛書簡に見える。

> 久保・天野来る。天野は吾が見る所恐らくは違はず。是れは高杉来帰を待ちて決すべし[13)]。

高杉が江戸から戻った際には、天野は私の遺志を継いで決起してくれるであろうという期待が窺える。天野は、松陰の江戸送りの際も見送っており、その様子を後に回顧して次のように述べている。

> 先生東送の時は、(安政6年5月）二十四日に品川（品川弥二郎）が呼びに来たから、すぐに参つたところが、先生のお母さんが仏壇に灯明をあげながら、無事に帰って来てくれ、といつたのを聞いた、先生は何も云はなかった[14)]。

翌朝も見送り、「先生の後姿を門前で見送つた時は、まことに感慨無量であつた」[15)]と回顧している。さらに、同年10月6日、死の20日前には、江戸獄中からの高杉晋作宛書簡に、松下村塾の塾生たちへの今後の期待や不安などについて綴っている。その中に天野の面倒を見てくれるようにと見える。

> 老兄深く顧みて呉れ給へ。天野少しく才を負み勉強せず、是れ惜しむべし[16)]。

親愛の情で目をかけられた天野は、松陰の死をどのように受け止めたのだろうか。それを今更明らかにすることはできないが、後の回顧で松陰から受けた教訓について、次のように語っていることからは、天野のこの後の人生を追っていく上で示唆的である。

・大正5年（74歳）

> 始めて先生に見え、教を乞ふものに対しては、必ず先づ何の為に学問をするかと問はる……先生の訓へて曰く、学者になつてはいかむ、人は実行が第一である……是の実行といふ言は、先生の常に口にする所なり[17)]。

・昭和8年（91歳）

> 立志といふ事を云はれた。何でも人は仕事をしなければならぬ、と云はれた事を記憶して居る[18)]。

晩年までもなお強く残っていた記憶という点で、松陰の教えとしてその後の人生に深く宿った指針とも言うべきものが「立志」であり「実行」であったことを窺い知ることができる[注3)]。

3　吉田松陰の海事意識

先に掲げた天野の後年の回想に、「松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた」とあるように、彼が後に造船分野を志向する上で、大きな感化を果たした松陰の海事意識について具体的に触れておきたい。それはまた、後述する長州藩―少なくとも松門グループ―の海事志向を先導する役割を果たしたとも考えられるためである。

まず、松陰の海外認識が大きく変化する契機となったのが、初めての遊学となる嘉永3年（1850）の長崎行きである。同年9月14日、平戸に入った松陰は、まず葉山佐内のもとを訪れている。佐内の『辺備摘要』や、清の魏源がアヘン戦争の体験を記した『聖武記附録』を読んだ松陰は、西洋兵学や軍事技術に大きく目を開かされることになる。

しかしながら、それでも松陰の根本的な認識自体が改まったわけではなかったようである。10月2日には、フランスの砲将ペキサンス（百幾撒私）の書を読み、その内容に対する私見を次のように記している。

> 大数の小船に此の炮を備へて、小数のリニー船と戦はんに、必ず大勝を得べきなり。故に海軍の船は甚だ大ならざるものを造るべし。又此くの如く小なれば、敵砲を避くるの一助となるなり。船小なるときは、之れを造る速かにして進退し易し、戦に於て大艦より勇にして捷便なり。其の船小にして惜しむに足らざればなり。その他濱汀に艤するを得、敗軍の時隠匿し易し。盆辨弾、皆的船を貫穿するを以て、之れを防拒するには重大なる船鎧を用ひざるを得ず。已に此くの如くなれば、水軍に於ては、皆剣を執りて

決戦するに至るべし[19]。

海戦においては多くの小船に砲を備えれば大勝でき、さらに小さい船のほうが敵の砲撃を避けたり、大鑑よりも敏捷に動けたりするため、海軍の船は余り大きくないものを造るべきだとし、最後には剣で決すべしとあることは、この時点での松陰の意識の程度が窺えて興味深い。翌日には、同書の蒸気船の記述、翌々日には同じくペキサンス『台場電覧』といった書から、海岸砲台の高さや設置場所などについて書き記している[20]。旧態依然の認識からまだ抜け出せていない点も見られるが、この長崎遊学を機に松陰は兵学者として西洋の軍事力や海防について多くを学び、伝統的兵学から西洋兵学を研究する転機となったことは確かである。翌嘉永 4 年（1851）、松陰は藩主毛利敬親に従い江戸に赴くが、そこで大きな影響を受けることになる師・佐久間象山への入門といった具体的行動につながっている[21]。

佐久間象山のもとで洋学を本格的に学びながらも、松陰のみでなく欧米列強の脅威が実際の強い危機感にまで高まるには、やはり実物との遭遇を待たねばならなかった。嘉永 6 年（1853）6 月、浦賀沖に現れた黒船四隻のうち、とりわけ多くの砲を備えた二隻の強大な蒸気船の威容を目の当たりにした松陰の海事意識と現状に対する危機感の高まりは、ここに至り決定的なものになった。以後、我が国も同様に「堅艦」を造り、操練を盛んにしなければ自国を守ることはできないと考えるようになる。嘉永 6 年(1853)の「将及私言」では次のように述べている。

> 此の時に方りて堅艦の夷人を制するに足るものを製し、糧運に支りなく、又応援に便ある如くなさずんば、何を以て守りを為さんや。……或は蘭人に命じて艦を貢せしめ、又は工匠に命じて新たに製造し、並びに江戸及び各藩にて盛んに水操を興すことを許允ある如くあり度きことと、上は恐れ多くも天朝・幕府の御為め、下は六十六国生民の為めに希願の心黙止し難く存じ奉る事あり[22]。

西洋軍艦の実物に接見した衝撃の大きさは、後に松陰が「亜墨舶（アメリカ船）に乗じ、海に出で五大州を周遊せんと欲す、事覚し捕せらる」[23]と回顧するように、海外渡航へと強く駆り立てたが、嘉永 7 年（1854）に試みたペリー率いる黒船による密航計画は失敗し、国禁を犯した罪で萩の野山獄に入った。

松陰は、水戸藩の儒学者会沢正史斎が尊王攘夷について記した『新論』に傾倒していたが、安政元年（1854）の入獄中に、兄杉梅太郎に宛てた書簡には次のように見える。

> 会沢の塩谷のと云うて新論の籌海私議のと云ふは高名なる著述なれども、其の当今下手守備の策は艦と砲とのみ。さあ大船官許ありたりと云ふ時、此の二人へ就いて軍艦は如何して作るものかと問うても其の作り方は知らず……吾が師象山則ち曰く、「……先づ蘭学を精研す、愈々精研すれば愈々隔靴掻痒、故に実地に行きて見ること方今の専要なり云々」と[24]。

いざ尊王攘夷を唱えても、その理論の先頭に立つとされた会沢正史斎らも、造艦についての実学的な知識は有していないと指摘している。それまで傾倒していた二人の尊王攘夷の理論的著述に懐疑の目を向けて、西洋の「艦」や「砲」の実際の製造の可否を問題にし、師の佐久間象山の言を引いて、「実地に行きて見る」ことの重要性を綴っているところに、松陰の造船・造艦といった実学重視への意識の転換が見られる。

また、象山の次のような幕府への建白が受け入れられなかったことを承けて、松陰が密航を決意したことが、安政元年に同じく獄中で綴った「幽囚録」からうかがえる。

> 宜しく俊才巧思の士数十名を撰び、蘭船に付して海外にもだし、其の便宜をして事に従い、以て艦を購わしむべし。則ち往返の間、海勢を識り、操舟に熟し、且つ万国の情形を知るを得ん。其の益を為す。因って竊かに建白する所有り。然れども官能く之を断行する無し。予航海之志、実に此に決す[25]

さらに松陰は、安政 5 年（1858）の「続愚論」の中で、今後の海事人材育成のための振興策とも言うべき建言を書き上げた。ここに至って松陰は、実際に「大艦」を製造し、多くの若者を「万国航海」さ

せることによって、富国強兵策を立てることの必要性を明確に説いている。

一国に居附き候と天下に跋渉仕るとは人の智愚労逸、近く日本内にても懸絶致し候事、況や四海に於てをや。何卒大艦打造、公卿より列侯以下、万国航海仕り、智見を開き、富国強兵の大策相立ち候様仕り度き事に御座候[26]。

そして、小国でも海を渡ることで国力を外に広げることを可能にする「航海の益」を指摘し、朝廷が自らその実行姿勢を示すために、京都に文武兼備の大学校を設立することを提案する。

外国の事情を知らずして徒らに海岸を守り貧窮に困しみ候は誠に失策に之れあるべく、英吉利・佛蘭西などの小国にてさへ、万里の遠海へ亙り人を制し候は、皆々航海の益に御座候。此の所早く御着眼之れなく候ては覚束なく存じ奉り候事。天朝より勅諚を以て厳重仰せ出され候へば、思召通り可なりには行はれ候筈には御座候へども、実は天朝より実事を以て御示し成されず候ては十分に参り兼ね申し候。右に付き差当り愚考仕り候は学校に御座候。京師に於て文武兼備の大学校御造建成させられ、上皇子皇孫より下齊民に至るまで、貴賤尊卑の隔なく寄寓仕らせ、文武講習を宗とし、天下の英雄豪傑を此の内へ聚め候様仕り度く存じ奉り候[27]。

さらに、その大学校においては、「航海」で一学科を置き、二十歳前後の若者を船に通じさせるとともに、十代で志ある者も船に馴れさせて航海術を身につけさせよとする。また、オランダ船に託し毎年数十人ずつを近隣諸国に外航させることなどを通して数年内に我が国の航海術も盛んになるとした。

航海の事、一口に航海航海とのみ申し候へば、極めて成り難き事に相聞え候へども、是れを行ひ候は夫々順序之れある事に御座候。航海は一科の学に相成り居り候事に付き、学校中へ此の学所一局相建て、其の学に長じ候もの入学仕らせ候儀一説に御座候。又吾が国の航海、東北蝦夷・松前より西南対馬・琉球まで、自在に通船致し候事に候へども、只今の所にては専ら船頭舸子の事に成り果て候故、武家の士にても此の術を会得致し候もの之れなく、況して公卿の歴歴をや。夫れ故学校中にて人材を選び、二十左右少壮の者を諸国の港々へ遣はし通船に託し、海勢幷びに船上の事心得させ、又志あるもの十歳左右の童兒をも丸に船頭に託し置き候事勝手に致させ、専ら其の術を精究致させ度く、是れ等も皆公卿より御引立成され候事、是れ二説に御座候。和蘭陀は二百年来来航仕り候事にて、墨夷其の外新来の夷国とも違ひ、且つ往々御国の御為めを謀り候事に付き、此の船に託し壮士数十人づつ年々広東・爪哇（ジャワ）其の外へ御遣はし成され候事、是れ三説に御座候。此の三説を以て航海の基と成され候て、清国・朝鮮・印度抔の近国へ出掛け候様成され候はば、数年の内航海の事は大いに行はれ申すべく存じ奉り候。此の条亦早く其の総督を定むるに在り[28]。

朝廷の大学校構想として実現するには至っていないが、吉田松陰によるこれらの言論は[注4]、天野をはじめ松門の後進たちに海事へと目を開かせる大きな契機となったことは、後の彼らの行動からも確かであろう[注5]。

４　藩内の海事及び英学志向をめぐって

安政６年（1859）に松陰が刑死した後、天野は勤王志士として奔走し、高杉晋作や久坂玄瑞と行動を共にしている[29]。天野が造船分野へ進んだ契機としては、先に見た松陰による海事重視の感化の一方で、藩政の影響も看過できない。すなわち、桂小五郎、松島剛蔵、大村益次郎らによって整えられていく海事を含む藩内の洋学重視の風土である。松陰から直接海事志向の感化を受けた高杉や久坂、他ならぬ天野もまた、こうした風土も相まって少なからぬ影響を受けたと言えよう。

嘉永６年（1853）６月の黒船来航は、外圧の危機感を一気に高めた。同年９月には、幕府は寛永以来の大船建造の禁令を解き、諸藩に造船方法の調査などを命じた。その後、同年11月には長州藩は相州（相模湾）警備を命じられるとともに、翌安政元年（1854）２月には、幕府から大船を建造するように要請を受

けたが、当時の逼迫した藩の財政事情や、そもそも建造経験すらない現状からは二の足を踏まざるを得なかった。

そうした中で、長州藩初の洋式船建造について計画段階から奔走し、大きな尽力をしたのは桂小五郎（木戸孝允）であった。桂は嘉永 5 年（1852）11 月からの江戸での剣術修業の傍ら、安政元年に相州警備への出仕を命じられて以来、艦船の船体構造を実地で見分した経験を持つ中島三郎助を訪ね、安政 2 年 7 月からは彼に師事し、約半年間、自ら造船技術を学んでいる。

この時期に桂が吉田松陰に宛てた書の草稿には、造船に対する造詣が深い中島への弟子入りが叶い、藩の海事の先駆になろうとする堅固な意志を表明するとともに、日本人の手による造船という同じ方向性を見つめる松陰との情報共有に少なからぬ高揚感が感じられる。

> 私朔日ニ中島エ参リ三郎助ニ面会仕、悉細之趣談候処、引請振モ至而宜敷、彼ノ論ニモ何レ日本ニ而製造致シ候得バ、宜キ書ヲ得而研究致シ候ヨリ外ハ無之候事故、東条（英庵）モ参リ候ハヾ、且而米ヨリ舶来致シ候製造書悉敷相調べ、雛形ヲ先ヅ造リ立候積リニ御座候故、一々是等之事申付候様申候、其中伊豆ニ而スクウネル製造有之候故、此方エモ遣シ候様申候、其故私モ中島エ寄食仕度由之処、引請モ至テ宜敷、二畳半程ノ鹽物固屋有之候故、座ヲ張呉候様申候、二三日中に込込相成候ト奉存候[30]。

同年 11 月には、桂も戸田浦で建造なったスクーネル船（ヘダ号）について造船及び操縦の実際を視察し、造船に関わった船大工を藩に招聘し、独自の船艦製造を行うことを藩政府に建言している。彼による視察や実地体験、藩政府への建白などを通して、安政 3 年（1856）には藩主毛利敬親による洋式船建造命令につながった。これにより萩に恵美須ヶ鼻造船所が置かれ、安政 4 年（1857）、長州藩は初めての洋式船を完成させ、「丙辰丸」（47 トン）と名付けられた。全長約 25 メートル、幅 6 メートル余の二本マスト三枚帆の帆船である（図２）。

吉田松陰を海事の理論面での中心人物とすれば、その一番の理解者であり、現実路線で行動に移し、洋式船を実際の形として藩にもたらすことで、その後の藩内の海事志向を一気に広げた功労者は桂小五郎であったと言える。

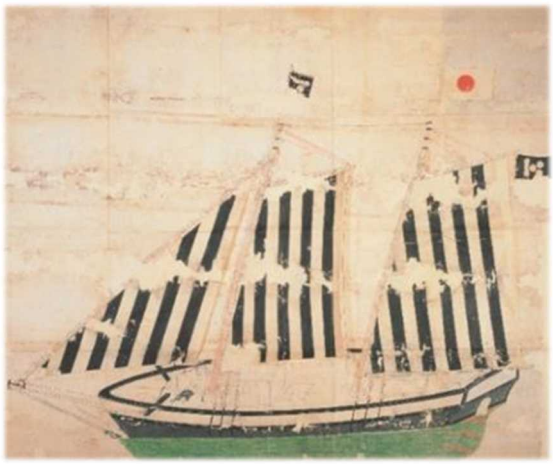

図２　長州藩初の洋式船「丙辰丸」
（山口県文書館蔵）

第一次長崎直伝習生として、藩で最初にオランダ海軍士官に海事を直接学んだのは、西洋学所師範役であった松島剛蔵であり、その後の藩の海事を牽引していくことになる[31]。安政 6 年（1859）3 月、松島は海軍の創設と遠洋航海実施の必要性について藩政府に意見書を提出している。しかし当時、丙辰丸は藩唯一の洋式船であったため、慎重を期して遠洋航海は許可を得られずにいた。そこで松島は、航海術を学んだ長崎直伝習生の帰藩を待った上で藩の許可を得て、同年 12 月には戸田亀之助を中心として、まず長崎・大坂への 100 日間にわたる長期航海訓練を実施した。さらに藩の要職に就いていた桂小五郎も松島の海軍振興策を支持し、万延元年(1860)4 月 10 日～6 月(日不詳)、丙辰丸による江戸への遠洋航海訓練が実施されることになった[32]。

この長州藩にとって初めてとなる江戸への遠洋航海には、海軍教授方・松島剛蔵を長とし、長崎直伝習生の士分 4 人、定乗舵子 4 人、雇浦舵子 3 人、平郡舵子 8 人が乗り込み[33]、これに江戸到着後は藩命により築地軍艦操練所で蒸気機関を学ぶことになっていた高杉晋作が加わった。高杉は前年（安政 6 年）には昌平黌で学んでいたが、久坂宛に「一身ニて致ス時ハ大軍艦ニ乗込、五大洲ヲ互易ス〔ル〕ヨリ外ナシ、夫故僕も近日より志ヲ変シ、軍艦之乗方、天

文地理之術ニ志、早速軍艦制造場処ニ入込候ラハント落着仕居候」[34]と書き送るなど、強い海事志向を有していた。高杉は、この江戸航海に際して記した「東帆録」の序文において「大丈夫生于宇宙間、何久事筆研」[35]（大丈夫宇宙の間に生まれ、何ぞ久しく筆研に事へん）とまで海事に生きる気概を述べている。

当時 18 歳の天野清三郎は、「艦長松島に嘆願して一船員となつて乗り込み」[36]とあり、この長州藩初の江戸航海に「舸子」として乗り込んだ。どのような経緯でそうなったのかを語ってくれる史料はないが、先に見た松陰の言に、「此の人（天野）深く老兄（高杉）に服す、其の他一人も服する人なし」[37]とまで言わしめた松門の先輩で、天野が心服していた 4 歳年上の高杉晋作の教唆といった線が濃厚であるように思われる。高杉もまた前年に亡くなった松陰の遺志を踏まえ、天野を気にかけていたことが窺える。まさに師松陰と、先輩高杉とのつながりが、後の人生につながる大きな契機となっている。

萩から下関海峡を経て、瀬戸内に航路をとり、紀州灘と遠州灘の風波で難渋した江戸航海は、陸路による通常の江戸行の3倍にもあたる約60日の日数を要した。当役の益田弾正は、この航海を次のように労っている。

> 数百里之海程ニ付、兵庫其外諸所ニて風波ニも逢候へ共程能相凌、殊ニ於遠江洋難風荒波ニて御船及危難候処、船頭舸子共え終夜諸事之駆引行届、御船無事ニ罷帰、遠海乗廻初て之儀旁不容易心配遂苦労候段被聞召上、兼々心掛宜敷神妙被思召候[38]

高杉自身は、江戸到着後には軍艦操練所入りを辞め、剣術修業名目の遊学に切り替えているが、丙辰丸に乗り込んだ天野にとって、藩の洋学を牽引する松島剛蔵や、高杉晋作と航海の苦難を共にしたことが、後に彼が造船の道に進む上において大きな影響を与えたことは疑いない。

さて、長州藩から海外に渡った人物に目を転じると、その多くが海外視察に加え、航海術あるいは海軍修業を目的としていたことが分かる。そこで、天野が丙辰丸での航海を経験した万延元年以降、藩から海外派遣および留学を経験した人々の動向を確認しておきたい[39]。長州藩から初めて海外に渡ったのは、北条源蔵である。黒船来航時に藩から浦賀に派遣され視察を行い、その後安政 2 年に第一次長崎直伝習生として派遣された彼は、万延元年に幕府の第一回遣米使節の一行に加わり、藩における海外事情見聞の草分け的存在となるとともに、万延元年 12 月には海軍教授方に就任し[40]、翌文久元年には庚申丸（丙辰丸に次ぐ長州藩 2 隻目の洋式軍艦）への乗組みを命じられている[41]。

桂右衛門と山尾庸三は「航海術」と「船中の規則」「異域海路の形勢」の視察を目的として[42]、文久元年（1861）2 月 10 日、幕吏の北岡健三郎に随い亀田丸に乗り込み、露領アムール地方（黒竜江口）まで渡航している[43]。しかし、当時幕府はまだ諸藩士の海外渡航を許しておらず、この周旋にあたったのが江戸有備館用掛だった桂小五郎である[44]。とくに山尾庸三は、四歳年上の桂とは江戸の斎藤道場（練兵館）から旧知の間柄であり、山尾のロシア行に関しては郷里の近い村田蔵六（大村益次郎）も周旋に努めている。山尾はその後も高杉、久坂、松島らによる御楯隊に加わり、松陰の遺骨の改葬でも高杉、伊藤らと行動を共にするなど[45]、松門に近いグループにあり、海事志向についても共有していたことが窺える。

同年 3 月の幕府による英仏両国派遣に際して、桂自身もまた一旦官を辞して欧州行の志を有していたが、周布政之助は国事多端を理由に斥けている[46]。高杉晋作も同様の希望を有していたがこれも許されず、結果として杉徳輔（孫七郎）が「航海術修業」を目的に、外国奉行差遣を命ぜられ、文久 2 年 1 月、幕府の遣欧使節に随行した。

文久 2 年（1862）7 月には、外圧に対抗する幕政改革の一環で、諸大名にも海軍強化が奨励された。時を同じくして高杉晋作が、貿易視察を主目的とする幕府の千歳丸による上海視察に随行したことで、改めて内憂外患の危機意識を高めることになり、一人晋作のみならず、その後の長州藩の方向性にも大きな影響を与えることになったことは周知のとおりである。

同年、長州藩はイギリスのマセソン商会から最初の蒸気船「壬戌丸」（ランスフィールド号）を購入すると、山尾とロシア行を果たした桂右衛門を船長とするが、その乗員の求めに応じた中に志道聞多（井上馨）と遠藤謹助がいる。さらに、志道は操船に馴れていないことを理由に外国人を雇い教習を受けることを強く主張し、これに村田蔵六が賛同し実現している[47]。また同年、第二次長崎直伝習生であった野村弥吉（井上勝）は、藩から函館での海軍修業を命じられている。周布政之助の手紙に、野村弥吉一同にも英学修業させるつもりであると見えることからは[48]、野村もまた将来の洋学の担い手として期待されていたことが窺える。翌年、藩政府は「癸亥丸」（ランリック号）を購入し、野村は船長、山尾は測量方として乗組み、江戸から兵庫へ曳航している。

文久3年（1863）5月12日には、志道聞多（井上馨）、野村弥吉（井上勝）、山尾庸三、伊藤俊輔（伊藤博文）、遠藤謹助の五人が藩主の承認を受け、海軍学習得のためイギリスへの密航留学に発っている[注6]。彼らがすでに何らかの形で航海に従事していた顔触れであること、また松門及び松門に近いグループであることに着目したい。さらに、海外渡航の必要性を強く感じていた桂は、ここでも彼らともに留学することを欲していたが、やはり藩の要職にあることが足かせとなり留学を断念する一方で、同志の洋行を周旋することに徹している[注7]。欧米の実地で学ぶことは松陰の念願でもあったが、それが藩の政策として現実のものになり、桂はそれを藩政の立場に身を置きながら陰に陽に支援したことになる。

留学の主たる目的に海軍術の習得が掲げられていたことも、海事に通ずることが藩の活路を開くことにつながるという意識を伝えていよう。当の天野からしても、松門を含む近しい先輩格の人物を中心とする洋行の動向は、単なる点としての出来事ではなく、その延長線上に自らを置くことを意識させるのに十分であったと思われ、天野の海事志向や洋行への憧れを強く後押ししたものと思われる。さらに、長州藩公認の洋行がイギリスを主体とするものであったことが、後の天野にも大きな影響を与えたことは確かである。この理由の一端として、藩内における英学重視の傾向も指摘できよう。

安政6年2月、久坂玄瑞は、藩の洋学の拠点である西洋学所（後の博習堂）への官費入舎を命ぜられ、7月には舎長に任じられた。同時期の彼の「九仞日記」には、「軍艦運用」「艦砲」「運転術」などの会業や、「軍艦大略」の模写、「海域大観」の閲読など、海事関係について多く記されている[49]。この7月、8月にはすでに舎長として熱心に海事や兵学を学ぶ久坂を、天野も目の当たりにしていたであろう。この後も、文久2年1月から3月にかけての天野と久坂の関わりには、「詩経会」参加（1月10日、2月5・10・15日）や訪問（1月26日、3月9・10日）、久坂の母の実家である生雲への同行（1月27～29日）、丙辰丸での2度目の江戸航海に発つ報告（3月7日）など、久坂との関わりの深さが日記から知られる[50]。

再び丙辰丸で江戸へ向かい、その後も久坂とともに上洛して謀議をこらすなど、二人が近しい関係にあったことは、天野が後に西洋学所の後身である博習堂に入る契機としても強く影響したはずである。万延元年、久坂は「英学修業」のため江戸で学び、蕃書調所教授方の堀辰之助の影響もあり、洋学の中でもすでに英学が優勢であり、今最も気に掛けておくべき国はイギリスであると松下村塾門下の同志に書き送っている。

> 僕麻布御屋形（中屋敷）に罷在申候。毎暁卯牌より小川町蕃書調処教授方堀辰之助方へ通ひ申候、英学は未開、字書も乏敷候得は、少々困難は御座候。此度帰自米利幹者之咄にも、外国大抵英文行れ候由御座候、蛮書を読からしては英学便利之様被考候、今時可最慮者英吉利也[51]

また、先に見た杉徳輔（文久2年幕府遣欧使節）による高杉晋作の父に宛てた報告も、次のようにイギリスの強大さを指摘している。

> 英国強大万国ニ秀出スルコト申迄モ無之候得共、武備諸工作場等ニ至ル迄殊之外盛ニ御座候、我神州ト雖モ二百年太平之弊風を守、因循ニ打過候而は併呑セラルゝモ難計候[52]

国内事情を優先したために計画段階で終わっているが、後に慶応元年、高杉晋作が伊藤春輔（博文）とともに念願が叶い、「英学修業、時情探索」[53]とし

て、藩によりイギリス行きが認められていることも、藩政における積極的なイギリス重視を裏付けている。

この杉徳輔以後の長州藩からの海外留学組―文久3年：長州ファイブ、慶応元年：南貞助・山崎小三郎・竹田庸次郎、慶応3年：毛利親直・福原芳山・河瀬安四郎、慶応3年：河北俊弼・渡辺蒿蔵（渡航時アメリカ）―のほとんどがまずイギリスを目指したのは、こうした藩内におけるイギリス重視という機運の高まりも影響していよう。この選択が後の近代国家形成、特に工業化の面で大きな意義を有したことは、少し視点を変えれば、長州藩による海外情報の共有なり、活用能力の高さを示しているとも言えそうである。

また、長州藩における英学に対する関心の高まりについては、寺田芳徳氏が藩の所蔵する洋書についての調査検討を通して、「文久年間に英学は明確な形で導入され、慶応年間には蘭学を凌駕して洋学の新しい主流となった」[54)]と指摘していることも挙げておきたい。その中心は海軍学校におけるものであり、自覚的に英学を取り入れた全国的にも早い例であったことが特筆される[注8)]。

5　おわりに

以上のような藩内における動向は、天野の海事志向や洋行への憧れを強く後押ししたものと思われるが、志士として活動していた天野が海外留学に至った経緯とその後については、後半部（下）に譲りたい。

図３　英・ウェブスター辞典〈ポケット版〉
※左頁の中央右寄りに「海軍学校」蔵書印

参考文献

1) 金子久一編『松陰門下の最後の生存者渡辺翁を語る：昭和十五年三月七日渡辺翁追憶座談会速記録』,86 頁,萩響海館,1940 年（以下、『渡辺翁』）。
2)『渡辺翁』金子久一自序。
3) 海原徹『松下村塾の人びと』,132 頁,ミネルヴァ書房,1993 年。
4)『渡辺翁』,61 頁。
5) 同上。
6)『吉田松陰全集』,第 8 巻,64 頁,大和書房,2012 年（以下、『全集』）。
7)『全集』第 4 巻,507 頁。
8)『全集』第 8 巻,194 頁。
9)『全集』第 5 巻,180−181 頁。
10)『全集』第 8 巻,229 頁。
11) 同上,233−234 頁。
12)『全集』第 9 巻,554 頁。
13)『全集』第 8 巻,356 頁。
14)『渡辺翁』,67 頁。
15) 同上,49 頁。
16)『全集』第 8 巻,403 頁。
17)『渡辺翁』,72−73 頁。
18) 同上,66 頁。
19)『全集』第 9 巻,72 頁。
20) 同上,72−73 頁。
21) 栗田尚弥「葉山佐内の思想に関する一考察―「思想家」吉田松陰誕生前史―」（『法学新法』第 121 巻第 9・10 号,2015 年）。
22)『全集』第 2 巻,17 頁。
23)『全集』第 9 巻,377 頁。
24)『全集』第 7 巻,310 頁。
25)『全集』第 1 巻,589−590 頁。
26)『全集』第 4 巻,348 頁。
27) 同上,348−349 頁。
28) 同上,349−350 頁。
29)『渡辺翁』,76−77 頁,80 頁。
30)『松菊木戸公伝』,37 頁,明治書院,昭和 2 年。
31) 小川亜弥子「松島剛蔵と洋学―長州藩洋学者が歩んだ尊王攘夷派への道―」（『洋学』23,2015 年）参照。
32) 小川亜弥子『幕末期長州藩洋学史の研究』,147−148 頁,

思文閣出版,1998 年。
33)「丙辰丸製造沙汰控」（『山口県史』幕末維新 7,史料編,,860 頁,2001 年）。
34)「安政 6 年 8 月 23 日久坂玄瑞あて」（『高杉晋作史料』第一巻, 70 頁,マツノ書店,2002 年）。
35)「東帆録」（前掲『高杉晋作史料』第二巻,5 頁）。
36)『渡辺翁』,77 頁。
37)『全集』第 8 巻,229 頁。
38) 前掲「丙辰丸製造沙汰控」（『山口県史』幕末維新 7,史料編,861 頁）。
39) 三宅由紀子「幕末期長州藩の海外留学生」（『山口県地方史研究』第 85 号,2001 年）、及び山田裕輝「幕末期萩藩の海軍建設とその担い手」（『年報近現代史研究』9,2017 年）参照。
40)「忠正公伝」第九編(25)（山口県文書館蔵）。
41)「艦船一件」二（山口県文書館蔵）。
42) 前掲『松菊木戸公伝』,67 頁。
43)『修訂防長回天史』第三編上,69−72 頁,及び第三編下,484 頁,マツノ書店,1991 年。
44) 前掲『松菊木戸公伝』,66-67 頁。
45) 兼清正徳『山尾庸三伝』,19-31 頁,山尾庸三顕彰会,2003 年。
46) 前掲『松菊木戸公伝』,68 頁。
47) 前掲『修訂防長回天史』第三編下,456 頁。
48) 同上,541 頁。
49)「九仭日記」（前掲『久坂玄瑞全集』,238−239 頁）。
50)「江月齋日乗」（前掲『久坂玄瑞全集』,289-303 頁）。
51)「佐世八十入江子遠宛書簡」（前掲『久坂玄瑞全集』,482−485 頁）。
52) 前掲「忠正公伝」第十二編(3)。
53) 前掲『高杉晋作史料』第一巻,284 頁。
54) 寺田芳徳『日本英学発達史の基礎研究』下巻「第 6 章長州萩藩における英学発達過程と三田尻海軍学校の成立」,519 頁,溪水社,1998 年。

注記

注１）渡辺蒿蔵については、従来、金子久一編『松陰門下の最後の生存者渡辺翁を語る：昭和十五年三月七日渡辺翁追憶座談会速記録』（以下、『渡辺翁』）（萩響海館,1940 年）、吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』（マツノ書店,1976 年）、『吉田松陰全集』第 10 巻（大和書房,2012 年）「関係人物略伝」（47 頁）などを出典として語られることが多いが、断片的で全体像を知るには不十分である。また、「明治七年帰朝、工部省に入り、次いで大阪司検所長となる。後長崎造船所を創設し」（前掲「関係人物略伝」）、明治九年に至りて帰朝す」（前掲『増補近世防長人名辞典』）の波線部など、明らかな誤りも散見する。現在、彼の経歴をよく伝えるのは、海原徹氏による労作『松下村塾の人びと』（ミネルヴァ書房,1993 年,132−134 頁,267−270 頁）及び『松下村塾の明治維新』（同上,1999 年 ,255−262 頁）である。ただし、二書の性格上、いずれも渡辺の専論ではないこともあり、また紙幅の関係もあると思われるが、種々の因果関係については必ずしも触れられてはいない。なお、同氏による近刊『最後の門下生渡辺蒿蔵が語る松下村塾』（萩ものがたりシリーズ 55,2017 年）も「渡辺蒿蔵略歴」（5−15 頁）として一章を割いているが、前掲二書をほぼ踏襲した内容である。

注２）岩橋文吉『人はなぜ勉強するのか―千秋の人吉田松陰―』（モラロジー研究所,2005 年）に、「松陰門下の奇才天野清三郎」（57−66 頁）として、彼の「立志」を称える文章がある。その中で天野清三郎の視点から、政治活動をするにも頭の働きが鈍く、臨機応変の処置ができず、勉強嫌いなため船大工を目指した、といった描かれ方をしている。伝記を語る上でのエピソードとしては面白いが、それが後の本人の回想を踏まえているとすれば、本人の謙遜も考慮すべきで必ずしも実像とは言えまい。しかしながら、同書の後人の著述への引用が増えるに従って、そうしたイメージが広がっていったものと思われる。

注３）同様の内容として、今地延一氏の聞き書きに「書物を読んでも、読むばかりでは駄目だ、事業をやれと云はれました。事業と云つても金儲けの事業ではなくて、何か国家の為に具体的な事をやれと云はれよつた」（『渡辺翁』,54 頁）とある。

注４）長年、航海訓練所の帆船をはじめとした練習船で船員教育にあたり、現在、東京海洋大学教授の國枝佳明氏によれば、この松陰の言説は、航海学科の独立・早期教育・海外への実習航海といった点で、理に適ったものであるという。これらは当時のオランダ海軍の影響など、

必ずしも松陰の独創とは限らないが、松陰の海軍人材育成に対する問題意識の高さや情報収集能力を裏付けるものであるとも言えよう。

注５）文久二年の久坂玄瑞による「解腕痴言」に、「殊に舟艦は海国の最急要の物にて……是亦大藩雄国に勅し打造して貢しめ兵庫浪華堺等に列ね置給ふべし、兵仗あり軍糧あり舟艦ありて何ぞ夷等の闌入を憂むや」(『久坂玄瑞全集』,マツノ書店,1992 年,p.435）と見えることなどを一例として挙げられよう。

注６）いわゆる長州ファイブの留学に至る経緯やロンドンでの様子については、犬塚孝明『密航留学生たちの明治維新―井上馨と幕末藩士―』（日本放送出版協会,2001 年）、同『―ヴィクトリア朝英国の化学者と近代日本―アレキサンダー・ウィリアム・ウィリアムソン伝』（海鳥社,2015 年）参照。

注７）彼の日記に次のような回顧が見られる。「夕刻山尾庸蔵井上弥吉来る……余与彼等遠遊の約あり于時余係官依て余断然相留彼をして令遠遊」:明治元年 11 月 21 日（『木戸孝允日記』一,東京大学出版会,1967 年,145 頁）、「英人カールに面会すカールは攘夷の已前井上伊藤山尾等と洋行を陰に彼に謀る彼一諾任其事而して余其時已に在官義不能洋行井上諸子と訣別して諸子を促して洋行せしむ」:明治 2 年 5 月 17 日（前掲『木戸孝允日記』,224 頁）。

注８）寺田前掲書に、「三田尻の『海軍学校』は、幕府が安政 2 年（1855）に長崎に開設した海軍伝習所、また安政 5 年（1858）に同じ長崎において発足した『英語伝習所』に次ぐ英学源流上の重要な位置を占めるものと考えられる」（528 頁）とある。またその一例として、慶応元年に創設された長州藩の海軍学校が、すでにウェブスター辞典のポケット版（図 3）を所蔵していたことを挙げられよう。ポケット版という用途を鑑みれば、それを学内外で携帯して用いるだけの英学への取組があったことの傍証になるものと考えられる。なお、同資料については、先方からの希望により所蔵先を明記していない。

付記

本稿は、平成 29 年度山口県の「明治 150 年記念後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業」による成果の一端である。